

## 児童期から青年中期にわたる居場所の発達の様相 ～居場所の心理構造の理解を目指して～

藤田依久子・大日方重利<sup>1</sup>

The Developmental of Aspects of *Ibasho* from Childhood to Middle-stage of  
Adolescence : Understanding of the Psychological Construct of *Ibasho*

Ikuko FUJITA and Shigetoshi OBINATA

It is often mentioned that one of the current characteristics of youth is that they have difficulties in forming interpersonal relationships, and even if there is a relationship, it is very weak. This trend has led to the concept of a psychological *Ibasho*, a Japanese term which has emerged since the 1990s. *Ibasho* refers to a place where individuals can feel safe and be themselves. In modern society, we often lament that many children have been deprived of their childhood due to various changes in the environment, and children find it hard to find their *ibasho*. During adolescence and youth, changes in their psychological development made them eager to seek their own *ibasho*. Research reports in the past have mainly targeted at late adolescents, such as university students, and very few studies have focused on *ibasho* in childhood, early and mid-adolescence. This research is a review of the relationship between *ibasho* and the changes in the psychological conditions of our target group, during the transition from childhood to early and mid-adolescence – among junior high and high school students. The results revealed clearly that *ibasho* is closely related to specific changes in other psychological factors, such as self-esteem and affinity motive in each stage. This is more evident during the transition from childhood to adolescence, especially during the change towards mid-adolescence. Furthermore it was declared that the place and the psychological place of sense of belonging change from childhood to mid-adolescence.

キーワード : childhood, early-adolescence, mid-adolescence, *ibasho* (a psychological place of sense of belonging), self-esteem, affinity motive

---

<sup>1</sup>大阪教育大学名誉教授, 神戸学院大学教授・静岡産業大学特任教授を経て, 現在NPO法人コミュニティ総合カウンセリング協会副理事長

## はじめに

人間は社会的動物であるとは、古代哲学者プラトンの言葉といわれているが、個人が社会的な存在になるためには本能以上に経験によるところが遥かに多いといえよう。その経験は、また他者との関わりという人間関係によることも論を待たないであろう。特に、個人が生まれてから成長するまでの過程において、より安定した望ましい人間関係が維持されることが、より望ましい社会性、ひいては人格形成のために不可欠といえる。例えば、社会学者のMead (1934) は、個人が他者との相互交渉を通じて自我の中に客我（自分を見る自分）を形成することにより、人格が確立されていくと述べている。これは年代的には、青年期以降のことになる。さらに、藤田 (2004) は、社会学の立場から、現代の青年を取り巻く様々な状況を考察し、彼らの自我確立の危機について問題提起をしている。この状況とは、広く見れば社会・文化的なものであるが、個人が日常的に直接関わっている環境である家族、学校、友人関係なども含まれる。この日常的な環境である人間関係の場が、個人にとって安心感があり好ましいことを、“その人には居場所がある”という表現がなされる。

ところで、“居場所”という概念が、教育や心理学などの分野で使われるようになったのは近年のことである。本義は、個人が居る所という物理的な空間のことであるが、1992年に文部省（現文部科学省）の不登校児童・生徒への指導の在り方として、学校が子どもたちにとって安心して、自分らしく過ごせる場であることの重要性が説かれ、“心の居場所”になるように配慮すべきであるという提案がされた。それ以来、心理的な意味での居場所という言い方が広まってきた。

しかしながら、この居場所（心理的居場所）の定義はまだ確定されていないが、最初にこの用語を用いた文部省（文部科学省、1992）によれば、「精神的に安定していることができる場所」とされている。また西中 (2014) は、従来の諸研究における居場所の定義について、キーワードとして8つに分類している。つまり、①被受容感、②安心感（解放感）、③本来感、④自己存在感（自己肯定感）、⑤自己有用感、⑥達成感（充実感）、⑦内省、⑧自己の確保、である。このように居場所の捉え方・考え方は多岐にわたっているが、石本 (2010b) は、より包括的に「一般的に快感情を伴う場所、時間、人間関係等」と定義づけている。

ところで、この心理的な居場所とは、従来の心理学の枠からみるとどのように位置づけられるのだろうか。個人の心理状況の捉え方は、歴史的には心理学理論として様々な考え方や見方が提唱されてきている。なかでも、行動主義の伝統においては、個人の心理は環境の関数であり、個人を取り巻く環境的条件によって、心理状態や行動が規定されると考える。すなわち、子どもの成長や適応は、その子にとって望ましい環境であるか否かということが要求される。このことは、成人の生活や精神保健などにとっても同様である。一方、この望ましい環境条件について、従来の心理学や教育においては、外から個人に与えられた条件（愛情、援助、知的刺激等々）の良し悪しという、いわば客観的な指標が重視されてきたといえる。しかしながら、不登校など様々な不適応を理解し支援するためには、子ども本人が自分のおかれている環境をどのように受け止めているか（たとえば、安心して自分を表現できるか否か）という、個人の主観的な指標がより重要なものになってくるだろう。したがって、個人が自分のおかれている場所について、どのように考え捉えているかに焦点を当てた心理学概念が居場所ということになる。つまり、居場所とは、客観的環境に対して個人の感情的要素を交えた主観的認知ということもできる。ちなみに、この捉え方は、ラザルス、R.S.らのストレスの認知的評価モデルに相通じるものといえるだ

ろう。

近年、この居場所（心理的居場所）の概念やその考え方が心理学や教育のみならず、福祉や医療や産業などの分野にも幅広く導入されるようになってきていることは、大いに意義あることといえる。

ところで上述のごとく、心理的な居場所の概念が登場してから既に20数年経ち、居場所に関する研究論文や評論も少なくない。なかでも西中（2014）は、2014年までに発表された文献43件についてレビューしているが、そこに収録されていない文献や、その後2018年前半までに発表された6件を加えて、全49件について改めて筆者らの考えに基づいて概観してみる。

この49編は、居場所に関する論評やレビューが18編、オリジナルな研究論文が31編に大別される。さらに後者の31編についてみていくと、1編を除いた30編が児童期、もしくは青年期、または、その両者が研究の対象になっている。さらに、研究の内容をみると、ほとんどの研究が、居場所の年齢的変遷、および居場所と人格形成・適応などとの関連に焦点が当てられている。したがって、居場所があるということは、個人の誕生から成人になるまでの成長期、さらには生涯を通して極めて重要な心理状態であるという共通認識が醸成されてきていると言えるだろう。

さらに、居場所の研究内容についてみると、居場所の種類（分類）や心理的構造とその年齢的変遷に関する研究（小畑・伊藤2001、岸・諸井2011など）、および居場所と他の心理機能との関連に関する研究に大別される。後者においては、居場所と不登校（沖田1997、秦2000など）、居場所と精神健康（杉本2010、石本2010a杉本・庄司2006a, b, cなど）、居場所と適応（石本2010b、後藤・伊田2013、諸井・坂上・野島・岡本2015など）、居場所とアイデンティティ・自尊心等（山岡2002、小沢2003、諸井・坂上・野島・岡本2015、田島・山崎・渡邊2015など）、居場所と非行（廣井2000）など多岐にわたっている。そして、おおむねいずれの研究においても、個人にとって居場所の存在は、健全な心理的機能と関連していることが報告されている。

このように居場所に関する研究は多いが、そのほとんどは、個人にとっての居場所の有無が、現時点もしくは限られた一定の期間について検討されている。しかし、発達心理学の分野では、個人の対人関係が家族から友人、さらに一般的な社会的関係へと発達することが明らかにされていることから、対人関係とも関連性が強い居場所についても、発達の变化があると考えられる。このような研究として小畑・伊藤（2001）は、高校生と大学生の居場所として「友達」が最も多いということを報告している。

しかし、児童期（小学生）から青年前期（中学生）、さらに青年中期（高校生）における居場所の様相は、青年中期（高校生）から青年後期（大学生）における場合とは異なる様相がみられるのではないだろうか。なぜなら、少なくとも児童期までの日常的な人間関係は、上述のごとく家族関係とくに親子関係が中核的なものであるからである。さらに、その居場所が、年齢的变化に伴って継続して存在する場合もあれば、途絶、またある時期から再び作られることもあると考えられる。特に、児童期から青年期全般においては、上述の理由ゆえ、居場所の消長の変遷が生じやすいといえる。

## I. 研究の目的

上述の先行研究をふまえて本研究では、居場所の変遷が特に生じやすいと考えられる、児童期から青年中期における居場所の心理的構造を検討することを目的とする。そのために、以下の

3つの仮説が設定された。

仮説1. 児童期から青年前期さらに青年中期にかけて、居場所の種類は家族（家庭）から友人などの仲間関係に推移していくであろう。

仮説2. 青年期における自我発達のために、居場所と自尊心・親和動機の関連は、児童期から青年期にかけて強まるであろう。

仮説3. 児童期から青年前期にかけて、また青年前期から青年中期にかけて自分の居場所が継続して存在する青年は、そうでない青年と比べて、居場所について感じる居場所感の各因子得点が高いであろう。

## II. 方 法

### 1. 調査対象

中学生1・2年生57名（男18名，女39名）

高校生1・2年生111名（男62名，女49名）

いずれも、中国地方のA県内の生徒と関西地方のB県内の生徒で、その人数はほぼ2：1の割合であり、対象の地域差相殺が狙いである。

### 2. 調査時期

2018年6月～11月

### 3. 調査場所

生徒の在学校の教室

### 4. 調査手順

各学校において、調査実施の依頼を受けた教師が、調査目的、回答方法、結果の処理方法（集団の統計的処理）、回答の途中放棄の容認などに関して説明を行い、各調査用紙の各質問項目を生徒各自が黙読して回答してもらった。なお、フェースシートの記載は学年と性別のみの記載で、無記名である。

### 5. 調査用紙

#### ① 筆者ら作成の居場所の有無とその場所の調査票

ここでは、以前の学校時代と現学校時代それぞれの時制において、それぞれ自分の居場所があったか否か、あるか否かを問い、あった・ある場合はその場所を記入してもらう。すなわち、中学生に対しては、過去の小学校時代と現中学時代それぞれにおける居場所の有無を問い、高校生に対しては、過去の中学校時代と現高校時代それぞれにおける居場所の有無を問い、さらに居場所ありの場合には、その場所について具体的な自由記述を求めた。なおその際、居場所の例として、「クラスの友達といるとき」、「家で家族といるとき」、「学外サークルに参加しているとき」、「ゲームをしているとき」の4項目が示された。

#### ② 岸・諸井（2011）作成の居場所感尺度（全47項目）

これは、自分の居場所感の強さを5つの因子ごとに測定する。各因子は、安定感、疎外感、被受容感、没入感、有用感である。各因子について簡単に説明すると、安定感とは、生き生きと安心して生活していること、疎外感とは、自分らしさを出せないで寂しさを感じていること、被受容感とは、周りの人が自分を大切に、理解してくれていると感じられること、没入感とは、何かに熱中でき、生きがいを感じていること、有用感とは、自分が人から

頼りにされ役立っていると感じていること、である。

質問項目の例としては、「その場所にいると、心から泣いたり笑ったりできる」、「その場所においても、一人ぼっちの感じする」などである。

また、疎外感以外の4因子は強いほど居場所感も強く、逆に疎外感が強いことは居場所感が弱いことを示す。

回答方法は、「よくあてはまる」、「あてはまる」、「どちらともいえない」、「あてはまらない」、「まったくあてはまらない」の5件法である。

なお、本尺度の実施は、①において述べたように、過去の時点における回顧的回答と現時点における回答の2回にわたり独立して行われた。③ 山本・松井・山成（1982）の自尊心尺度（全10項目）

これによって自尊感情（ES）の程度を測定する。

質問項目の例としては、「自分に対して肯定的である」や「自分は敗北者だと思えることがよくある」などである。

回答方法は、②と同様の5件法である。

④ 杉浦（2000）の親和動機尺度（全9項目）

これは、他者との関係性をどの程度深く築きたいかを測定する。

質問項目の例は、「人と深く知り合いになりたい」や「一人であるよりは人と一緒にいたい」などである。

回答は方法、②、③と同様の5件法である。

なお、③の自尊心尺度と④の親和動機尺度は、中学生と高校生それぞれ一度のみ、現在の時点での回答が求められた。

### Ⅲ. 結 果

#### 1. 居場所の発達の变化について

児童期から青年中期にかけて、個人がそこに居ることで安心感や生活意欲を感じる居場所の種類について、figure1には中学生による小学校時代の回顧、figure2には中学生の現時点、figure3には高校生による中学校時代の回顧、さらに figure4には高校生の現時点それぞれの結果が示されている。居場所の種類が直接比較できるように、それぞれの時期における各居場所の割合（%）を算出した（“居場所なし”の回答を含む）。なお、方法において述べたように、居場所の種類への回答は被調査者の自由記述で、表現の仕方や居場所の細かな点について違いがみられたため、筆者らによって以下の7項目に分類して集計を行った。

①家族との関わり、②友だちとの関わり、③部活・クラブ（学外を含む）、④学校生活（部活・クラブ以外の場）、⑤一人であること（単独活動を含む）、⑥その他、⑦居場所なし

これら4つの結果（円グラフ）を通覧すれば、まず居場所なしの生徒は、小学校時代においては1%台であるが、中学生及び高校生においては30%強に増大している。ただし、高校生の回顧による中学生の結果は7%台と少ない。次に居場所の種類をみると、居場所を家族とした割合が、小学生では35%と多いが、中学生では20%ないし16%、さらに高校生では約5%に激減している。また、居場所としての友だちも、小学生では41%であるが、中学生と高校生では30%程度に減少している。しかしながら、同じ仲間との関わりである部活・クラブと学校生活に関しては、小学

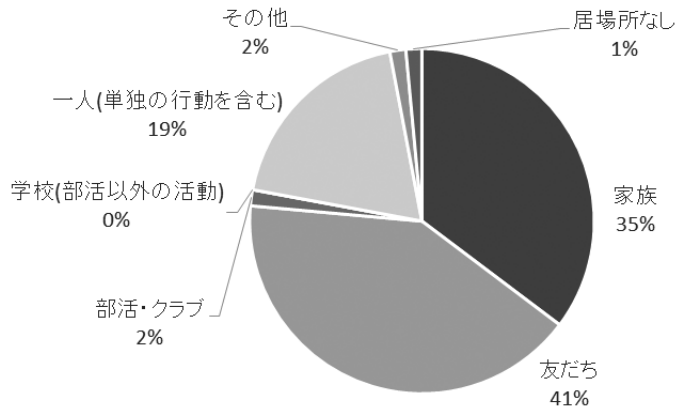


figure 1 居場所の分類 (現中学生の回顧)

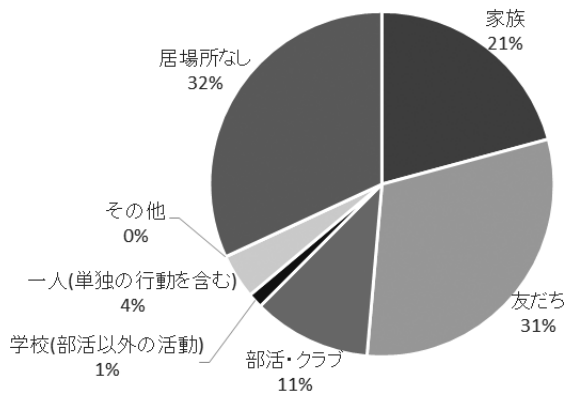


figure 2 居場所の分類 (現中学生の現在)

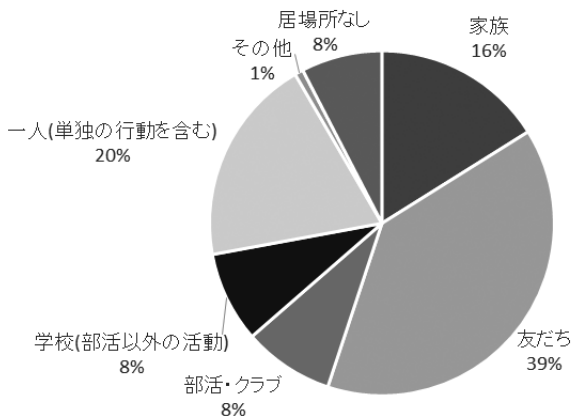


figure 3 居場所の分類 (現高校生の回顧)



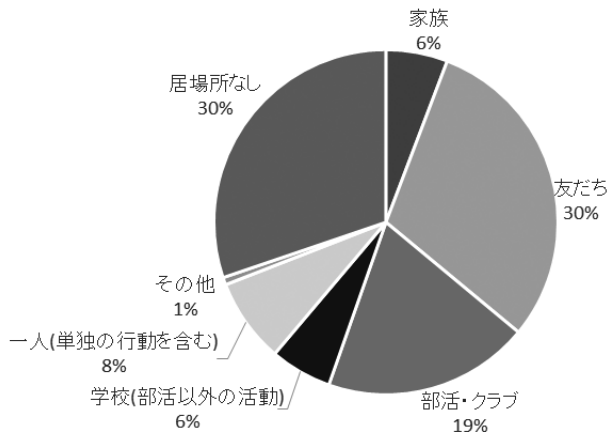


figure 4 居場所の分類 (現高校生の現在)

生では両者合わせて1%台であるが、中学生では両者合わせて10%台になり、さらに高校生では両者合わせて25%になっており、なかでも部活・クラブの増加が目立つ。居場所が一人であるこの場合は、小学生が一番多いが(19%台)、中学生でも回顧の場合は同じく19%台であり、現中学生では4%台に減少している。また現高校生においても8%であり、年代とともに減少傾向にある。

次に、上記の結果における主要な違いについて、ノンパラメトリック法のカイ自乗検定(対応のある2標本の場合はマクネマー法)を行った結果を述べる。まず、居場所を家族と家族以外の2つに分け、時期を中学生における現在と小学生時の過去の2つに分けた2×2分割によるカイ二乗値は12.25 ( $p<.01, df=1$ ) (table1)であり、同様に、高校生における現在と中学校時の過去についてのカイ二乗値は7.25 ( $p<.01, df=1$ ) (table2)といずれも優位差が認められた。つまり、小学校から中学校さらに高校と進むにつれて、居場所として家族よりも友人や学校などの比重が高まっている。このことは、居場所を家族、友だち、学校などの3つに分け、時期を、中学生の小学校時と高校生の中学校時の2つに分けた3×2分割による検定のカイ二乗値は、12.78 ( $p<.01, df=2$ ) (table3)、同じく対応のない現在の中学生と高校生の群間でのカイ二乗値は11.22 ( $p<.01, df=2$ ) (table4)であり、対応のある群間の検定と同じく有意差が認められた。

さらに、仲間との関わりのなかで部活・クラブや他の学校生活に焦点を当て、その群と家族群との比率について検定した。その結果、中学生における小学生時(過去)と現在の中学生時の対応のあるカイ二乗値は8.00 ( $p<.01, df=1$ ) (table5)、高校生における中学生時(過去)と現在の高校生時の対応のあるカイ二乗値は8.33 ( $p<.01, df=1$ ) (table6)といずれも優位差が見られた。さらに小学生時(過去)と中学生時(過去)の対応のないカイ二乗値は9.10 ( $p<.01, df=1$ ) (table7)で有意差が認められたが、現在の中学生と現在の高校生のカイ二乗値は3.75 (ns,  $df=1$ ) (table8)で有意差は認められなかった。しかし、有意ではないが、部活の比率については中学生18%、高校生32%で、全体的な傾向と一致している。そして、これらの検定結果をまとめると、部活・クラブや学校生活が居場所になる者の割合が増加し、その分だけ、単なる遊びや交流を中心とする友だちが居場所になることは相対的に減少してくる。

table 1 現中学生における過去の(小学生時)と現在(中学生時)における居場所の変遷(人数)  
(対応のある2×2分割)

		現在		計
		家族	家族以外	
過去	家族	12	15	27
	家族以外	1	29	30
計		13	44	57

 $\chi^2=12.25(p<.01, df=1)$ table 2 現高校生における過去の(中学生時)と現在(高校生時)における居場所の変遷(人数)  
(対応のある2×2分割)

		現在		計
		家族	家族以外	
過去	家族	7	17	24
	家族以外	3	84	87
計		10	101	111

 $\chi^2=7.25(p<.01, df=1)$ table 3 中学生の過去の(小学校時)と高校生の過去の(中学生時)における居場所の違い(人数)  
(対応のないm×k分割)

		計			
		家族	友だち	それ以外(部活・サークル等)	
過去	小学生時	25	24	8	57
	中学生時	24	45	42	111
計		49	69	50	168

 $\chi^2=12.78(p<.01, df=2)$ table 4 現中学生の現在と現高校生の現在における居場所の違い(人数)  
(対応のないm×k分割)

		計			
		家族	友だち	それ以外(部活・サークル等)	
過去	中学生	15	21	21	57
	高校生	9	41	61	111
計		24	62	82	168

 $\chi^2=11.22(p<.01, df=2)$ table 5 現中学生における過去の(小学校時)と現中学生時の居場所の変遷(人数)  
(対応のある2×2分割)

		現在		計
		部活・学校生活	それ以外	
過去	部活・学校生活	1	0	1
	それ以外	8	48	56
計		9	48	57

 $\chi^2=8.00(p<.01, df=1)$



table 6 現高校生における過去（中学生時）と現高校生の現在における居場所の変遷（人数）  
（対応のある2×2分割）

		現在		計
		部活・学校生活	それ以外	
過去	部活・学校生活	11	6	17
	それ以外	21	73	94
計		32	79	111

$\chi^2=8.33(p<.01, df=1)$

table 7 現中学生の過去（小学生時）と現高校生の過去（中学生時）における居場所の違い（人数）  
（対応のない2×2分割）

		部活・学校生活		計
		小学生時	中学生時	
計	小学生時	1	56	57
	中学生時	20	91	111
計		21	147	168

$\chi^2=9.10(p<.01, df=1)$

table 8 現中学生の現在と現高校生の現在における居場所の違い（人数）  
（対応のない2×2分割）

		部活・学校生活		計
		中学生	高校生	
計	中学生	10	47	57
	高校生	35	76	111
計		45	123	168

$\chi^2=3.75(ns, df=1)$

## 2. 居場所と自尊心・親和動機の関連について

居場所感の5因子それぞれと自尊心及び親和動機との関連について見るために算出された相関係数について、それぞれの年代別にtable9からtable12に示す。

まず、自尊心について居場所因子との相関をみると、小学校時（中学生の回顧）と現中学生では没入感とのみ有意な正の相関がみられるが、高校生の回顧による中学生時においては安心感、被受容感及び有用感の3つの因子との有意な正の相関がみられ、さらに現高校生においては疎外感を除く4つの因子との有意な正の相関が認められる。

一方、親和動機については、小学生時において安心感、被受容感、有用感の3つの因子と有意な正の相関がみられ、現中学生においては疎外感を除く4つの因子と有意な正の相関があり、疎外感とは有意な負の相関が認められる。つまり、全5因子との有意な相関がみられる。高校生の回顧による中学時代と現高校生においては、没入感を除く4因子と有意な相関がある。また上述の自尊心の場合と同様に、高校生の回顧による中学生時代と高校生の現在のいずれにおいても、安心感と有用感については有意な正の相関があり、疎外感については有意な負の相関が認められる。

table 9 過去の小学生時における各居場所因子と自尊心・親和動機の相関関係 (r)

	安心感	疎外感	被受容感	没入感	有用感
自尊心	.021	.23	.12	.490 ***	.099
親和動機	.374 *	-.054	.553 ***	.213	.413 *

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

table 10 現中学生における各居場所因子と自尊心・親和動機の相関関係 (r)

	安心感	疎外感	被受容感	没入感	有用感
自尊心	.243	-.008	.234	.442 *	.191
親和動機	.859 ***	-.718 ***	.864 ***	.247 *	.806 ***

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

table 11 過去の中学生時における各居場所因子と自尊心・親和動機の相関関係 (r)

	安心感	疎外感	被受容感	没入感	有用感
自尊心	.311 **	-.128	.422 ***	.043	.376 ***
親和動機	.306 **	-.330 **	.457 ***	-.134	.354 **

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

table 12 現高校生における各居場所因子と自尊心・親和動機の相関関係 (r)

	安心感	疎外感	被受容感	没入感	有用感
自尊心	.208 *	-.080	.238 *	.222 *	.330 **
親和動機	.528 ***	-.494 ***	.582 ***	.014	.477 ***

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

### 3. 居場所の変遷と居場所感因子の関連について

次に、時系列による居場所の変遷、つまり過去と現在のそれぞれにおける居場所の有無が、現在の居場所感因子とどのような関連があるかをみていく。調査対象が中学生の場合は、小学生時（過去）と現在の中学生時（現在）について、高校生の場合には、それぞれ中学生時（過去）と現在の高校生時（現在）における居場所の有無である。その回答にもとづき過去と現在の居場所の有無について、過去も現在も居場所がある群（ありあり群）、過去には居場所があったが現在は無い群（ありなし群）、過去と現在いずれも居場所がない群（なしなし群）、過去には居場所がなかったが、現在はある群（なしあり群）の4群に分けた。さらに、それぞれの群において、居場所感の各因子得点の平均点について過去から現在への変化を調べた。

まずtable13は、現中学生と現高校生それぞれにおいて各群に属する人数の内訳を示す。次に、figure5からfigure9までは現中学生の結果が、figure10からfigure14までは現高校生についての結果が示されている。なお、現中学生においては、なしあり群に相当する生徒は居なかったため、他の3群についての結果である。また、中学生と高校生のいずれにおいても、ありあり群の人数が圧倒的に多く、他の3群は極少であるため、それぞれのfigureにおける統計的有意差検定（分散分析等）は適用できなかった。

この結果についてまず、中学生と高校生いずれにおいても、ありあり群における因子得点は、

table 13 居場所の変遷に関する各群の説明と人数

	各群の説明	中学生の人数	高校生の人数
ありあり群	過去、現在ともに居場所があると感じている群	49名	94名
ありなし群	過去には居場所があったが、現在は居場所がないと感じている群	7名	8名
なしなし群	過去、現在ともに居場所がないと感じている群	1名	8名
なしあり群	過去には居場所がなかったが、現在は居場所があると感じている群	0名	1名
計		57名	111名

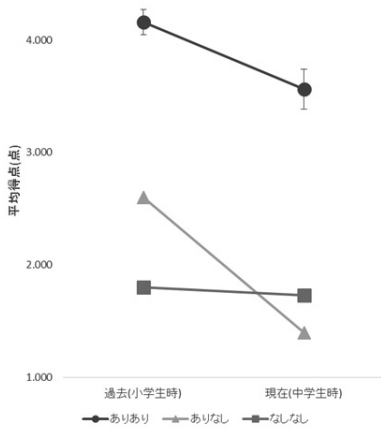


Figure 5 居場所の変遷と安定感 (中学生)

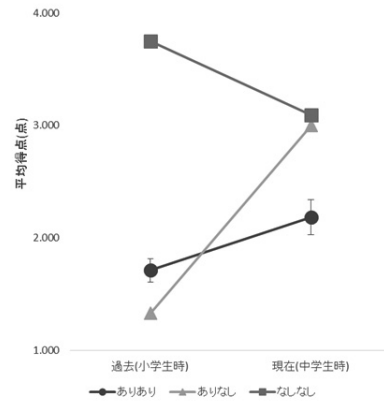


Figure 6 居場所の変遷と疎外感 (中学生)

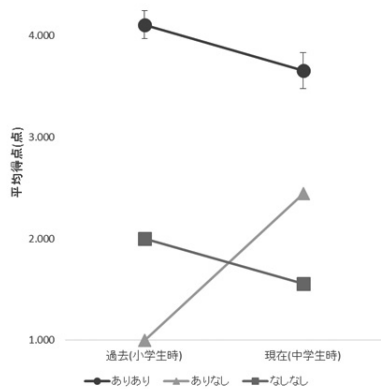


Figure 7 居場所の変遷と被受容感 (中学生)

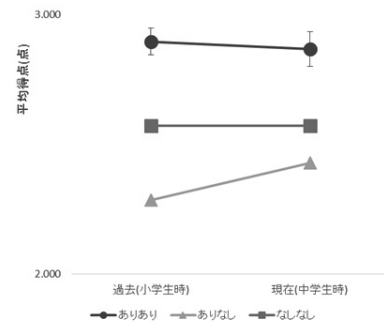


Figure 8 居場所の変遷と没入感 (中学生)

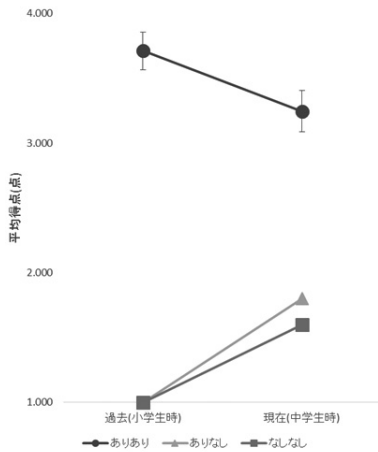


Figure 9 居場所の変遷と有用感 (中学生)

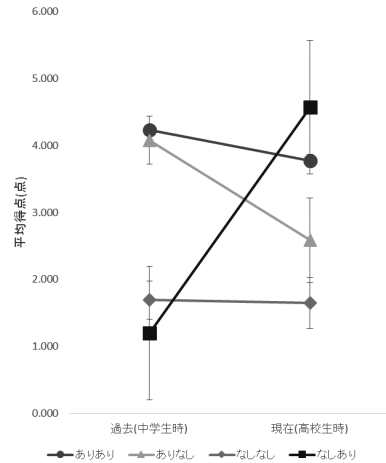


Figure 10 居場所の変遷と安定感 (高校生)

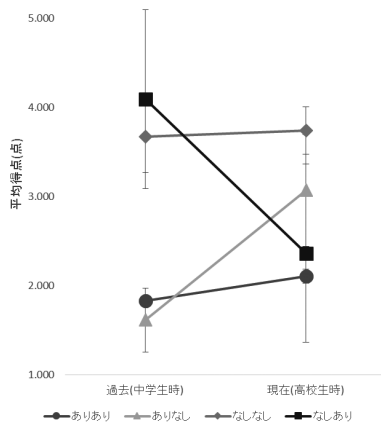


Figure 11 居場所の変遷と疎外感 (高校生)

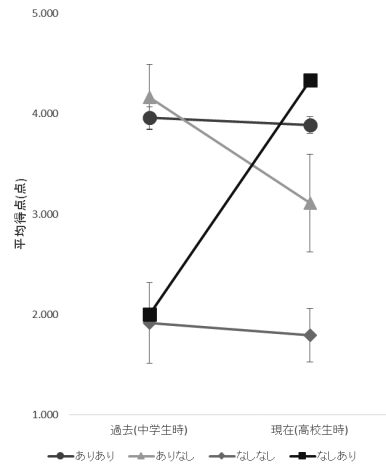


Figure 12 居場所の変遷と被受容感 (高校生)

他の3群と比べて疎外感因子では最も低く、他の4因子では最も高い傾向にある。しかし、過去と現在の時系列をみると、中学生と高校生いずれにおいても、過去よりも現在のほうが疎外感を除く4つの因子得点にやや下がる傾向がみられ、疎外感は逆にやや高まる傾向にある。

一方、ありあり群以外の他の3群においては、中学生と高校生ともに、過去より現在の因子得点が高くなっている場合と低下している場合が混在し、複雑な様相を呈している。ところで、上述のごとく、ありあり群は相当な人数であるので、統計的な一般化は担保できているといえるが、それ以外の3群の人数は中学生と高校生いずれも極めて少数であり、本結果の誤差は大きいと言わざるを得ない。

そこで、上記のごとく「ありあり群」の人数は中学生と高校生ともに圧倒的多数であるため、この「ありあり群」のみを取り上げて、過去と現在の各居場所因子の得点差に関して、対応のあ

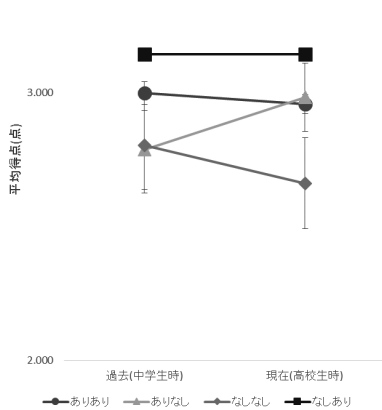


Figure 13 居場所の変遷と有用感 (中学生)

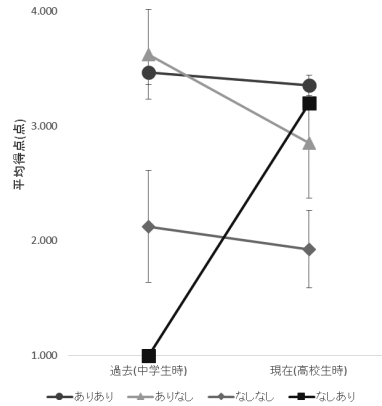


Figure 14 居場所の変遷と安定感 (高校生)

る2標本t検定を行った。その結果、過去と現在の得点差に有意差が見られたのは、中学生において、安定感 ( $t=4.62, p<.01, df=48$ ), 疎外感 ( $t=3.92, p<.01, df=48$ ), 被受容感 ( $t=3.32, p<.01, df=48$ ), 有用感 ( $t=3.58, p<.01, df=48$ ) の4因子である。一方、高校生においては、安定感 ( $t=5.65, p<.01, df=93$ ) と疎外感 ( $t=4.68, p<.01, df=93$ ) の2因子である(以上、いずれも同じ群の対応のある検定結果である)。小学生時から中学生時にかけての因子得点の低下は、中学生時から高校生時にかけてよりも顕著であるが、全体的な低下の傾向は一貫して認められる。なお、疎外感に関しては、中学生と高校生のいずれにおいても過去より現在の因子得点が増加している、つまり青年期が前期から中期に進むにつれて、疎外感の増大が認められる。

#### IV. 考 察

まず、設定された3つの仮説に関して考察する。

##### (1) 仮説1について

居場所の変遷についての結果によれば、小学生時の居場所は家族と友だちが拮抗して多いが、中学生さらに高校生になるにつれて家族が減少し、友だちは維持され、また部活・クラブや学校の仲間関係が増えてくる。したがって、「児童期から青年前期さらに青年中期にかけて居場所は、家族から友人・仲間に推移するであろう」という仮説1は、実証されたといえる。この結果は、高校生と大学生いずれにおいても、居場所として友人が最も多いという小畑・伊藤(2001)の報告とも一致するが、本研究において、このことが既に中学生(青年前期)から認められるという新たな知見が得られた。

さらに、同じ仲間であっても、中学生では仲良くしたり、一緒に遊んだりする友だちが居場所になることが多いが、高校生(青年中期)になると部活・クラブや学校活動で行動をともにする仲間も居場所として増えてくることが認められた。それゆえ、中学生から高校生にかけては、同じ同世代であっても居場所が、単なる遊び友だちから共に同じ目標に向かって協働する仲間への質的变化が窺われる。この現象は、全青年期を通じての交友関係がチャムからクリークさらにサークル・クラブなどに変化発展していくことに対応していると思われる。

## (2) 仮説2について

自尊心と居場所感の5因子との関連についての結果によれば、小学生時においては有意な相関は1つであるが、中学生さらに高校生においてはその相関の数が増加している。特に高校生（青年中期）において相関が顕著になることは、大学生における居場所感の心理的健康を媒介して自尊心と関連するという諸井ら（2015）の報告に対応するといえる。

また、親和動機と居場所感の関連については、小学生時からすでに有意な相関が3つあり、中学生から高校生における有意な相関は4つないし5つになっている。

したがって、「自尊心や親和動機それぞれと居場所感の関連は児童期から青年期にかけて強まるだろう」という仮説2は実証されたといえる。ただし、上述のごとく自尊心については、居場所感との関連が青年期になってから強まるが、親和動機については児童期からかなり強い関連性が認められる。このことから、児童期に居場所を持つことは親和動機つまり対人感情を高める効果があり、青年期における居場所は、自尊心という自我の発達に寄与すると考えられる。

## (3) 仮説3について

「過去と現在において居場所が継続している青年は、そうでない青年よりも居場所感の各因子が強いだろう」という仮説3についても、本研究結果からはほぼ実証されたといえる。すなわち、小学生時から中学生時、中学生時から高校生時それぞれにおける居場所の変遷と居場所感の5因子の関連をみると、居場所が継続している群は、そうでない群よりも各因子得点は高い水準が保たれていた（但し、疎外感に関しては逆に低い）。さらに、居場所が継続している青年における居場所感の各因子は、すでに小学生時から中・高校生時の水準にあることから、居場所の存在は児童期から青年期を通して有意義なものだといえる。このことに関連して石本（2010）も、大学生（青年後期）よりも中学生（青年前期）における居場所は、心理的適応や学校適応への影響度が強いことを示唆している。

また、居場所が継続して存在する青年において、居場所感の5因子のうち疎外感を除くポジティブな4因子については、小学校時より中学校時、さらに中学校時より高等学校時において得点が低下する傾向にあった。一方、ネガティブな因子である疎外感においては、逆に得点が上昇していた。この発達の傾向は、居場所が存在していても、その居場所に対する心理的充実感（安定性、被受容性、没入性、有用性）が、少なくとも児童期から青年前期さらに青年中期にかけて低減することを示している。この現象は、疎外感が逆に増大し続けていることと表裏の関係にあるといえる。このことは、青年期の居場所として中核を占める友だちや仲間との関係の不安定性、もしくは、それとは異なる青年期特有の心性によることを示唆していると考えられる。

ところで、本研究における居場所の継続性（ありあり群）について言及しておく必要がある。この継続性とは、過去と現在の両時制において居場所があるという状態であるが、中学生と高校生いずれも1年生もしくは2年生の9月から11月の期間の調査であるため、回顧の時点から現時点まで数か月から1年半ほどの間隔がある。それゆえ、過去と現在のいずれも居場所があると回答した生徒たちの中には、中学進学後または高校進学後の現時点までの期間中に、それまでの居場所が一旦中断したのちに、調査時点までに再び新しい居場所を見出した生徒も少なからずいたのではないかと予想される。そのために、中学生と高校生いずれにおいても9割以上の者において、「ありあり群」つまり過去と現在ともに居場所があるというように分類されたことが考えられる。すなわち、小学校から中学校へ、中学校から高校へと進学することにより、一時的であっても居場所を失うという経験をしている生徒も少なからずいたであろう。この経験は、一時



的な居場所喪失もしくは居場所危機と言えるかもしれない。一方、上級学校へ進学しても、それまでの居場所を維持したり、新たな居場所を速やかに得ている青年も少なくないであろう。これらいずれの場合でも、その過程において青年たちは、様々な心理的困難や葛藤を経験していることも推測される。この点に関しては、従来の先行研究も存在しないため、今後の重要な研究課題といえる。

最後に、以上述べてきた結果や考察を踏まえて、青年期の指導のあり方に言及する。

見てきたように、個人にとって安心感や生きがいを感じる心理的居場所は、少なくとも小学校時代から形成されているといえるが、その心理的構造は年齢とともに変遷したり、また居場所自体が消長したりしているため、家庭や学校においては、居場所が中断しないような配慮を講ずることが望まれる。その際、居場所は個人の主観的な経験であり、大人が外から与えることはできないが、青年期の各時期における心理的特性や対人関係の特徴をよく理解して、青年が居場所として感じられるような生活環境を整えていくことが基本になる。そのために本研究から直接示唆されることのひとつとして、青年の自尊心や親和動機の維持向上を図ることが重要であろう。

## 謝 辞

本研究にご協力いただいた中高生の皆さま、調査にお力添えをいただいた方々をはじめ、学習院大学法学部教授平野浩氏、元静岡産業大学教授・文部科学省初等中等教育局教科調査官岡田修二氏、また調査実施にご協力いただいた安田女子大学心理学部心理学科4年中本初花氏に心から感謝の意を表す。

## 付 記

本研究は、中国四国心理学会第74回大会学部生発表「中学生における居場所の獲得・喪失が自尊心・親和傾向に与える影響」（中本初花：指導教員藤田依久子）から一部のデータを利用している。

## 文 献

- 藤田依久子（2004）現代日本の若者の自我形成危機とポストモダン～都市の若者の位相「ジモティー」からの視点～、学習院大学大学院政治学論集（17）、139—185。
- 後藤明梨・伊田勝憲（2013）大学生における過剰適応と居場所感の関連 釧路論集：北海道大教育大学釧路分校研究報告，45，9—16。
- 秦彩子（2000）「心の居場所」と不登校の関連，臨床教育心理学研究，26，97—106。
- 廣井いずみ（2000）「居場所」という視点からの非行事例理解，心理臨床学研究，18，129—138。
- 石本雄真（2010a）こころの居場所としての個人的居場所と社会的居場所—精神的健康および本来感，43（1），72—78。
- 石本雄真（2010b）青年期の居場所が心理的適応，学校適応に与える影響，発達心理学研究，21（3），278—286。
- 菅野仁（2008）友だち幻想，筑摩書房。
- 岸加奈子・諸井克英（2011）女子大学生における居場所感覚—大学と家庭という心理的空間—，同志社女子大学生生活科学，45，20—28。

- ピーター・A・ラヴィーン (2016) 身体に閉じ込められたトラウマ：ソマティック・エクスペリエンシングによる最新のトラウマ・ケア, 池島良子・西村もゆ子訳：星和書店.
- Mead, G. H. (1934) *Mind, Self, and Society from the standpoint of a social behaviorist*, Chicago: The University of Chicago Press. 河村望訳：精神・自我・社会 (1995), 人間の科学社.
- 水無田気流 (2015) 「居場所」のない男, 「時間」がない女, 日本経済新聞出版社.
- 文部省 (1992) 登校拒否 (不登校) 問題について一児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して一, 文部省学校不適応対策調査研究協力者会議報告書.
- 諸井克英・坂上舞・野島彩・岡本有美子 (2015) 女子大学生における居場所感覚の基底にある心理学的機制的探索—過剰適応傾向, 抑うつ傾向, および自尊心との関連—, 同志社女子大学総合文化研究所紀要, 32, 71-83.
- 中野信子 (2017) ヒトは「いじめ」をやめられない, 小学館.
- 西中華子 (2014) 児童期・青年期における居場所に関する一考察—居場所感の視点から—, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科, 8 (1), 151-164.
- 小畑豊美・伊藤義美 (2001) 青年期の心の居場所の研究—自由記述に表れた心の居場所の分類—, 情報文化研究, 14, 59-73.
- 沖田寛子 (1997) 不登校現象と子どもの「居場所」, 山口大学文学会誌, 48, 17-35.
- 小沢一仁 (2003) 居場所を得ることから自らのアイデンティティをもつこと, 東京工芸大学工学部紀要 (人文, 社会編), 26, 64-75.
- 杉本秀映 (2010) 中学生の「居場所環境」と精神的健康との関連の検討, 湘北紀要, 31, 49-62.
- 杉本秀映・庄司一子 (2006a) 「居場所」の心理的機能の構造とその発達的变化, 教育心理学研究, 54 (3), 289-299.
- 杉本秀映・庄司一子 (2006b) 大学生の「居場所環境」と精神的健康との関連：過去「居場所環境」の認知との比較を中心に, 共生教育学研究, 1, 37-47.
- 杉本秀映・庄司一子 (2006c) 中学生の「居場所環境」と学校適応との関連に関する研究, 学校心理学研究, 6 (1), 31-39.
- 杉浦健 (2000) 2つの親和動機と对人的疎外感との関係：その発達的变化, 教育心理学研究, 48 (3), 352-360.
- 橘木俊詔 (2017) 遺伝か, 能力か, 環境か, 努力か, 運なのか, 平凡社.
- 田島祐奈・山崎洋史・渡邊美咲 (2015) 青年期における心理的居場所感に関する研究—学校充実感と日常的意欲との関連を通して—, 学苑, 900, 58-66.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982) 認知された自己の諸側面の構造, 教育心理学研究, 30 (1), 64-68.
- 山岡俊英 (2002) 大学生の居場所とセルフエスティームに関する一研究, 佛教大学教育学部学会紀要, 1, 137-167.